《春と修羅　第三集》一九三一年構想「田園詩篇」試論

木村東吉

一　はじめに

宮沢賢治の未完の詩集《春と修羅　第三集》の構想について記したメモが、『校本　宮澤賢治全集』（以下『校本全集』と記す）一二巻上に、詩法メモ7として収められている。黄罫22系詩稿用紙[1]に記されているので、一九三一年を遡らないと考えられるこのメモに基づいて、筆者は先に、その五部立の項目（田園、社会、病気、信仰、生活の五項目）の作品の概要を推定する仮説を提出した[2]。本稿はその裏づけの試みの一つである。

『校本全集』の『春と修羅　第三集』（以下、『校本全集』のテキストを『第三集』と記し、作者の構想を《第三集》と記す）から、黄罫22系詩稿用紙以前に使用された詩稿用紙の欄外に㋐印がある二六篇と、黄罫22系詩稿用紙に記されている七篇を抜き出し、この中から、後に『春と修羅　詩稿補遺』（以下、『詩稿補遺』と記す）へ移行した三篇と、紙葉に折り目痕などが残るために保留されたと推定される二篇を除いて「田園詩篇」とした。折り目痕が残るものは全部で四篇ある。だが、このうち二篇は黄罫22系詩稿用紙段階の逐次稿があるので、これは改めて採択されたものとみなした。また、七四一番「白菜畑」は、後に改稿されて番号を失い「1225」原稿用紙に記されているために『補遺詩篇Ⅱ』へ移行するが、これは捨てられた発表用原稿の可能性もあるので、ここでは含めて考えることにした[3]。本稿末尾の別表Ⅲに列挙したものがそれである。類似の方法で『詩稿補遺』から抜き出したものと比較してメモ7の部立の五項目に当てはめてみると、前者が「田園詩篇」に、後者が「生活詩篇」「社会詩篇」に合致する。そこで「病気詩篇」「信仰詩篇」が『疾中』に包括されたと見れば、メモに記されている部立の項目が揃う。これがとりあえずの推定の根拠である[4]。「田園詩篇」に黄罫22系詩稿用紙に記されている七篇を加えた理由は、詩人の構想が㋐印段階から、メモの時期まで持続しているなら、メモと同時期に手を入れた作品も注目すべきであると考えられるからである。

選び出された二八篇を《第三集》「田園詩篇」の全てと、筆者が考えているのではない。リスト・アップされた「田園詩篇」の作品には短いものが多く、メモの構想では一〇〇頁が予定されているから、これだけ

島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第二十七巻二号　一頁～一五頁　平成六年三月

では量的に不足である。選択した作品に手を入れて㋐印がつけられたのは一九三〇年頃までと想定し、黄罫22系詩稿用紙に記された逐次稿は一九三一年ころに作者の手が入ったものと考えるなら、両者の間に多少の時差があることも考えられ、その間に「田園詩篇」に含めるための手入れが行われた作品があった可能性が残る。しかし、そのような作品の探索は、「田園詩篇」の性格が判明した後に、初めて可能になるものであろう。したがって、二八篇以外の「田園詩篇」を推定可能にするためにも、また、《第三集》の構想全体の実態を把握するためにも、とりあえず二八篇の性格と、未完成ではあっても「田園詩篇」全体構造のおおよそを確認する必要があると考えられる。

二　「田園詩篇」の輪郭

筆者が「田園詩篇」と想定した作品群には、日付と番号がついている。これを日付順に配列して仮に季節ごとに区切ってみると、自然と村人が織り成す田園風景が空間構造を形作り、その中を生きる作中の詩人の生の軌跡が時間構造を支えている。成立時期が近いと思われる「装景手記」で、作者は「唯心論の人人は／風景をみな／諸仏と衆生の徳の配列であると見る／（中略）／それは感情移入によって／生じた情緒と外界との／最奇怪な混合であるなどとして／皮相に説明されるがやうな／さういふ種類のものでない」と記している。こうした考え方に立つならば、詩人が捉えた世界はそのまま、詩人にとって、「諸仏と衆生の徳の配列」によって創造された小世界のスケッチだったはずである。「田園詩篇」には、こうした小世界が描かれている。

「田園詩篇」に収められた作品は一九二六年の春から翌々年の夏までのものであるから、とりあえずその姿を、季節ごとに区分して見ていくと、単にモティーフの分析からだけでも、かなり意図的に組み上げられた構造と詩人の精神のうねりが見えて来る。㋐印稿作品と、黄罫22系詩稿用紙の逐次稿には、手入れ時期に時間差があるので後者を追加稿とみて、以下その意図も忖度しつつ見ていくことにしたい。

a　一九二六年の春

「田園詩篇」の前半では、田園の一つの季節が、村人と風景と詩人の自然交歓を描いた作品によって構成され、季節の推移と共に積み重ねられていく。その性格を一九二六年春の作品に即して述べるならば、およそ次のようになる。

冒頭の七〇六番「村娘」（一九二六、五、二一）は、「畑を過ぎる鳥の影」と「青々ひかる山の稜」を背景に、春の象徴ともいうべき「雪菜の薹を手にくだき／ひばりと川を聴きながら／うつつにひとともがたる」村娘をスケッチしたものである。田園の春の賛歌ともいうべきであろう。ここでは、人も風景を形作っている。作者にとって、風景と人とが形作るこの世界こそ、「諸仏と衆生の徳の配列」の一駒だったにちがいない。

風景を形作る村人のスケッチは、この後も、季節ごとに配置されている。一九二六年夏には七二六番「風景」の「片頬黒い県会議員」と七二七番［アカシヤの木の洋燈から］の「稲沼（ライスマーシュ）のくろにあそぶ子」を配し、秋には七四〇番「秋」で村の年寄りを描き、冬には一〇〇一番［プラットフォームは眩ゆくさむく］の「大都の名だたる国手」と一〇一二番［甲助　今朝まだくらぁに］の出稼ぎに出向く青年を置き、翌年一九二七年の春には、一〇三二番［あの大もののヨークシャ豚が］で、「ぐらぐらゆれてゐる」夕日に照らされて、金毛（ケ）の豚を追う「日本島の里長の

むすめ」を配す、といった具合である。一九二七年夏の一〇八〇番［さわやかに刈られる蘆や］における蘆の「刈り手」には、前年夏の「風景」のような明るさが無いという意味で少し異質だが、詩人は下書稿で、この農夫に「汗にやつれたおももちは／一つの動機臨むとき／聖者の像を持ち来す」可能性を捉えている。ここには、田園の四季をそこに生きる人々とともに賛美するモティーフが一貫している。

次の七一一番「水汲み」（一九二六、五、一五、）は、田園の風景を描いたものだが、この風景詩には、詩人の思いが強く反映されている。水汲みを繰り返している詩人が、ぎっしり生えたち萱の芽の敷物の上に立ち、風が海蛇のように吹き抜けていくさまを目で追うと、向こう岸で「蒼い衣のヨハネが」「すぎなの胞子（たね）をあつめてゐる」のが見え、岸にきて「あたらしいサーペント（創世記の蛇で、ここでは風を意味する）」にふれると、雲がパンになって売られるころになったという。夕日を受けて少し色づいた雲をいうのであろうが、詩人の空腹感も伝わってくる。

向こう岸で「蒼い衣のヨハネが」「すぎなの胞子（たね）をあつめてゐる」とあるが、西洋人の名前を持つ人物は、一〇四三番「市場帰り」にも「村老ヤコブ」が登場する。七二七番「アカシヤの木の洋燈（ランプ）から」で、たんぼが「稲沼（ライスマーシュ）」と表現されるのも、これと関連するであろう。「田園詩篇」には「片頬黒い県会議員」や「大都の名だたる国手」の他、甲助、太一、忠作、詮之助、そして「日本島の里長のむすめ」が登場する。登場人物がすべて片カナ名というわけではない。風を「サーペント」と捉えたり「憂陀那」と捉えたりすることと合わせ、ヨーロッパの創世記から現代の日本までを含む詩人の心象世界が、花巻の田園風景をカンバスにして自在に投影されている。これが「感情移入によって／生じた情緒と外界との／最奇怪な混合であるなどとして／皮相に説明される」のものでないと、作者が説明した「心象スケッチ」の一面であろう。ファンタジックな見立て表現が、「田園詩篇」の特色の一つである。

「水汲み」の「すぎなの胞子（たね）をあつめてゐる」人のイメージには、「装景手記」に「十三歳の聖女テレジアが／水いろの上着を着羊葉の花をたくさんもって」「はんの木の群落の下には／すぎなをおのづとはびこらせ／やはらかにやさしいいろの／budding fernを企画せよ／それは使徒告別の図の／その清冽ながくぶちにもなる」とある表現と似通うものがある。因みに羊歯に注目してみれば、七二六番「風景」七二八番［濂雨（カダチ）はそそぎ］、一六八番［エレキや鳥がばしゃばしゃ翔べば］に取り上げられ、最終稿では削除されているが、一〇〇一番［プラットフォームは眩ゆく寒く］の下書稿（一）（二）にも、「Ice-fern」「氷羊歯（アイスファーン）」という言葉がある。一〇五三番［おい　けとばすな］の下書稿（一）「政治家」では、「あっちもこっちも／ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたいやつらばかりだ／　　羊歯の葉と雲／　　世界はそんなにつめたく暗い／けれどもまもなく／さういふやつらは／ひとりで腐って／ひとりで雨に流される／あとはしんとした青い羊歯ばかり／さしてそれが人間の石炭紀だ」とある。おそらくこれは、詩人の羊歯への関心の原点を仄めかしている。シダ植物へのこだわりは、『疾中』の［胸はいま］等で自己の胸中に生える鱗木にまで広がっている。

また、雲を食べ物と見るモティーフは、七三三番「休息」から「停留所にてスキトンを喫す」まで続く。これらは個々の作品としてだけでなく、連続した作品群として読まれることを考えた素材選択である。このような風景詩が、詩人の生の軌跡を写して、「田園詩篇」の時間構造を

内部から支えている。

これらの作品を次の七一四番「疲労」（一九二六、六、一八、）と併せて読めば、この詩篇における作品空間が特殊なものであることを誰しも感じるはずである。「南の風も酸っぱいし／穂麦も青くひかって痛い」と感ずるほど詩人が疲れているとき、「わざわざ今日の晴天を、／西の山根から出て来たといふ／黒い巨きな立像が／眉間にルビーか何かをはめて／三っつも立って待ってゐる」のを見て、「疲れを知らないあゝいふ風な三人と／せいいっぱいのせりふをやりとりするために／あの雲にでも手をあてゝ／電気をとってやらうかな」と考えるというのである。川向こうに「蒼い衣のヨハネ」を見て、雲のパンを食べ、雲から電気を取ることを考え、「眉間にルビーか何かをはめ」た雲の立像と会話することを考える詩人が、水を汲み、畑を耕している。その意味で彼は、田園詩人だが、同時に自然と自在に交感するメルヘン中の人物でもある。こうしたところが、「田園詩篇」の特色である。

現行の『第三集』では、同時期の作品として七〇九番「春」七一五番［道べの粗朶に］と、七一八番「蛇踊」七一八番「井戸」が併せ収録されている。このうち「春」は、詩人の一種の決意表明であり、［道べの粗朶に］には、暗い現実に直面した詩人の苦悩があるが、これらは㋐印稿から除かれている。「蛇踊」と「井戸」は激しい労働に立ち眩みするまで働く詩人が、一時の休息に蛇をからかっているというものだが、こうした生活に直面した作品は、やがて『詩稿補遺』へ移行されている。㋐印による作品選択の一つの傾向が見える。

b　一九二六年夏

つづく七二六番「風景」（一九二六、七、一四、）では、場面が夏に移る。「松森蒼穹（そら）に後光をだせば／片頬黒い県会議員が／ひとりゆっくりあるいてくる／／羊歯やこならの丘いちめんに／ことしも燃えるアイリスの花」とある。早朝の霧の松森の中から朝日が昇る時の一場面で、「羊歯やこならの丘いちめんに／ことしも燃えるアイリスの花」と「片頬黒い県会議員」を対置したスケッチである。アイリスは東北の山地で真夏に咲く。地域の主要人物を取り上げている点では、後の真冬の氷華を背景に「大都の名だたる国手」を描いた一〇〇一番［プラットフォームは眩ゆくさむく］と対応している。「田園詩篇」全体の世界に社会的膨らみとアクセントを加えるものである。

次に追加された七二七番［アカシヤの木の洋燈（ランプ）から］（一九二六、七、一四、）には、真夏の田園に虫を追う子どもの姿が描かれている。一見地味な作品だが、これを加えることによって、作品集の構成に流れができ、朝から昼、そして次の午後の驟雨へと夏の風景がパノラマ風に捉えられていく。

七二八番［濯雨（カダチ）はそそぎ］（一九二六、七、一五、）では、驟雨に飛沫を上げる杉の木のそばで、詩人は畑を耕しながら一人で仕事に忿（いか）っている。春では空腹と疲労であったものが、早くも苛立ちに変わっているところに、詩人の農作業の厳しさが窺われる。

七三〇番［おしまひは］（一九二六、八、八、）も追加稿である。これだけを取り出して読んでも分かりにくい作品だが、雲と「せいいっぱいのせりふをやりとりする」詩人の表現であることが前提にあれば、雨上がりの水蒸気の多い大気の中で、増水した北上川を「青い光霞の漂ひと翻る川の帯」と捉えて、夕日に染まった早池峯連峰の一つを「骨ばったツングース型の赭い横顔」に見立てて「シャーマン山の第七峰の別当」

とし、雨が上がったことをこの山の要請によるとしていると了解される。[5]夏の終りである。

c　一九二六年秋

東北の秋は駆け足で冬に向かう。七三三番「休息」（一九二六、八、二七、）では、秋風を「あはは　憂陀那よ／冗談はよせ／ひとの肋を／抜身でもってくすぐるなんて」と描く。八月の末の作品だが、早くも秋風「憂陀那」が冷たく感じられている。七三六番［濃い雲が二きれ］（一九二六、九、五、）では、「向ふは寒く日が射して／蛇紋岩（サーペイン）の青い鋸（ティン）」とあるから、もう秋は深まっている。ついで、七三九番［霧がひどくて手が凍えるな］（一九二六、九、一三、）では、冷たい霧が深くなり、七四〇番「秋」（一九二六、九、二三、）では、詩人が稲作指導のために急ぐ里道に「野ばらの藪のガラスの実から／風が刻んだりんだうの花」を見たのも束の間、七四一番「白菜畑」（日付なし）[6]では、詩人が十日あまり病気で倒れていた間に「朝はまっ白な霜をかぶってゐるし／早池峰薬師ももう雪でまっしろ」というありさまである。それぞれの場面が美しく切り取られている。

ここで注目されるもう一つのことは、詩人の疲れの酷さである。「休息」で「あかつめくさと／きむぽうげ／おれは羆熊だ　観念しろよ」というのも、ほとんど這うように草花の上に倒れ込んで休む詩人の自虐的表現であろう。七三九番［霧がひどくて手が凍えるな］で、「……すすきの穂も水霜でぐっしょり／あゝはやく日が照るといゝ……」とあるのも、気象情報を参照してみると、[7]この日がとくに寒い日でなかっただけに、詩人の体調の不調が思われる。熱がある時、露に濡れて寒いため、「霧がひどくて手が凍えるな」という表現が生まれたのではあるまいか。

改稿が進むにつれて寒さの表現が強くなっている。七四一番「白菜畑」では、詩人の病気の間に白菜が成長していたことを喜び、「病んでゐても／あるひは死んでしまっても／残りのみんなに対しては／やっぱり川はつづけて流れる」ことを再発見し、「なんといふいゝことだらう」とする。詩人の病気が軽いものでなかったことが、この表現からも推測される。詩人は自分の運命を越えて自然の運行を信頼し、全面的に肯定している。同時に、詩人の体は急速に蝕まれている。

この時すでに、詩人の運命の暗転は暗示されていた。七三六番［濃い雲が二きれ］では、「濃い雲が二きれ／シャーマン山をかすめて行く」時、「雷沢帰妹の三」と言い残していったという。ここでも七一四番「疲労」七三〇番［おしまひは］につづいて、自然と交歓し、雲と会話する詩人の姿が継続されているが、「雷沢帰妹」とは、進むと凶の卦である。小説でいえば、伏線を張った形になっている。結婚の卦でいえば、三と五の爻で陽（男性）の上に陰（女性）がある形になるので凶なのだというが、そうした解釈を避けるかのように、作者は関連がありそうな一〇三九番［うすく濁った浅葱の水が］を改稿し、「生活詩篇」に移している。「白菜畑」でも、最後に「巨きな湯気のかたまりが／いま日の面を通るので／柱列の青い影も消え／砂もくらくはなったけれども」と書き加えている。

こうした準備段階を経て、追加稿の七四三番［盗まれた白菜の根へ］（一九二六、一〇、一三、）が挿入される。この作品には詩人の強い内省的な表現がある。新しい文脈が加えられていると見るべきであろう。農民への信頼が裏切られた詩人は、思わず盗まれた白菜の根へ萱穂をさして、萱穂に盗人を嘲弄させたが、やがてこれが「日本思想／彌栄主義

の勝利なのか」と自身へ激しく問いかけながらも、詩人は田園生活の中での自分と農民との間にすきま風が吹いていることに気づいている。「秋」において、村の年寄たちに待たれている心の弾みを描いた後にこの作品が置かれ、詩人はもう一つの試練に直面する。

d　一九二七年冬

追加稿一〇〇一番［プラットフォームは眩ゆくさむく］（一九二七、二、一二、）では、狷介に老いた学士で「大都の名だたる国手」が、「昔の友」を見送ると、その友は車中から「陶標の門」に向かって「至誠を面にうかべ／体を屈して殊遇を謝」している。「桑にも梨にもいっぱいの氷華」が輝く真冬の光景を背景に、地域の主要人物を描いているという意味で、七二六番「風景」と対応する作品である。「諸仏と衆生の徳の配列」を見た風景は変わらず美しい。ただ、この作品の場合は、「花鳥図譜」構想との関連が考えられ、これは創作メモ25で見ると、《第三集》構想の内部のものではないので、二つの構想が同一の作品を共有する関係に無い場合は、《第三集》の範囲外にある可能性もある。

この作品の下書稿段階（一）～（三）までは、「汽車近づけば／その窓がIce-fernで飾られもしやう」という舞台設定で、列車の中では尊大な態度を見せる官僚ふうの人物を描き、強い批判性を込めた作品であった。これが「田園詩篇」の追加稿として黄罫22系詩稿用紙に書かれた下書稿（五）とその手入れ稿段階で、突然性格を変えている。「氷羊歯」の部分さえ「氷晶」としている（「羊歯」は消してないが、『校本全集』では、「消し忘れか」とする）。この改稿方針にも「田園詩篇」の性格づけが窺われる。

一方、作者を取り巻く状況は厳しさを加え、追加された一〇〇八番［土も掘るだらう］（一九二七、三、一六、）では、「……山は吹雪のうす明り……」とか「……林は淡い吹雪のコロナ……」と描かれる自然状況を背景に、詩人は吹雪きの声に耳を傾け、「土も掘るだらう／ときどきは食はないこともあるだらう／それだからといって／やっぱりおまへらはおまへらだし／われわれはわれわれだと／（中略）／なんべんもきき／いまもきゝ／やがてはまったくその通り／まったくさうしかできないと／（中略）／あらゆる失意と病気の底で／わたくしはまたうなづくことだ」としている。自然交感が夏までの明るい文脈と入れ替わった形になっている。農民との間の容易に越えられぬ溝が、詩人にこうした声を聞き取らせるのであろう。七四三番［盗まれた白菜の根へ］の内省的文脈を継承したものでもある。

一〇一二番［甲助　今朝まだくらぁに］（一九二七、三、二一、）の場合は、下書稿（三）を選択した後、「横に二つ折り（上辺と下辺が重なるように）されていた痕がある」ので、一度は保留したのであろう。しかし、下書稿（四）（五）（六）は黄罫22系詩稿用紙に書かれた逐次形であるから、改めて採択したと見られる。下書稿（三）と下書稿（六）を比較してみると、下書稿（三）は、「唐獅子いろのずぼんをはいて／春木を伐（誤字を校訂）りに行く」若い仲間を見ていて、今どの辺りで働いているのかと山奥で働く人のことを思いやりながら、詩人が体を傷めたために仕事に加われないまま、農事相談にでかけることを「済まない」と思っているというものである。これが下書稿（六）では、甲助が朝早く綱取鉱山に出稼ぎに行ったことから、その行く手を思いやっているものに変わっている。「清水野がら大曲野がら後藤野ど／一人で威張って歩って／大股に行くぢはいがべぁ／向ふさ着げば撰鉱だがな運搬だ

がな／夜でば小屋の隅こさちょこっと寝せらへて／たゞの雑役人夫だがらな」といった具合である。詩人の自意識を削り落として、「……江釣子森が／ぼうぼうと湯気をあげて／氷醋酸の塊りのやう……」だとする冬景色とともに、出稼ぎに向かう青年の姿がユーモラスに描かれている。しかし、これを「村娘」と対応させてみると、明るいだけではない農村の厳しさも浮き彫りにされた形になっている。

e　一九二七年春

一九二七年の春は、前半の早春と後半の盛りの春に分けられ、前半は明るいものでない。一〇一四番「春」（一九二七、三、二三、）も、暗さの中の薄明りが印象的である。「野原は残りのまだらの雪と／黝ぶり滑べる夜見来川」とは、残り雪と増水した川の黒白の図だが、続けて「雲が淫らな尾を引いて／青々沈む波羅蜜山の、／松のあたまをかすめて越せば／山の向ふは濁ってくらく／二すじしろい光の棒と／わづかになまめく笹のいろ」とある。「波羅蜜山」とは、創作日付が春分の日であることから連想された曇り日の彼岸の山ということだろうが、幽界にも通じる全体の暗さの中に、「二すじしろい光の棒と／わづかになまめく笹のいろ」だけがわずかに明るい。

一〇一七番「開墾」（一九二七、三、二七、）では「野ばらの藪を、／やうやくとってしまったとき」ですら、仕事の完成を喜ぶのではなく、「日がかうかうと照ってゐ」るにもかかわらず、「そらはがらんと暗かった」とする。青空の底に虚無の闇を捉えるのは、梶井基二郎の『蒼穹』（一九二八年三月）にも通じる視点だが、続いて「おれも太市も忠作も／そのまゝ笹に陥ち込んで、／ぐうぐうぐうぐうねむりたかった」とある。詩人の、疲れの深さが滲んでいる。

一〇三〇番「春の雲に関するあいまいなる議論」（一九二七、四、五、）には、やや変質した自然交歓が見られる。詩人が「あの黒雲が、／きみをぎくっとさせたとすれば／それは群集心理だな」とするが、それは「われらにひとしい幾万人が／いままで冬と戦って来た情熱を／うらがなしくもなつかしいおもひに変へ／なにかほのかなのぞみに変へれば／やり場所のないその瞳を／みなあの雲に投げてゐる」ため、雲がそれを受け止め、反映しているのだと見ている。詩人はあえて「あのどんよりと暗いもの／温んだ水の懸垂体／あれこそ恋愛そのものなのだ」とするが、詩人が春の雲から、幾万人の不安を受け取ったことは拭えない。雲との対話は、やや変質して続いている。

ようやく春の明るさが見えてくるのは、後半の一〇三二番「あの大もののヨークシャ豚が」（一九二七、四、七、）からである。一九二六年春の「村娘」に対応する作品である。「ぐらぐらゆれてゐるのは夕日」に照らされて「けふははげしい金毛（ケ）に変り／独楽よりひどく傾きながら」走る豚を、「追ってゐるのは棒をかざして髪もひかる／日本島の里長のむすめ」と、一見ユーモラスで美しい農村風景が描かれている。しかし、夕日は「梢枯れかかった槻の木に」かかってぐらぐら揺れ、「小手をかざしてそらを見る」里長の姿が添えられている。一年前の「村娘」の春に比べ、斜陽のイメージが濃い。

次の一〇三六番「燕麦播き」（一九二七、四、一一、）は、前年の「水汲み」に対応する。ここでも「白いオートの種子を播き」つけているのに心に弾みはなく、「畑の砂は暗くて熱く／藪は陰気にくもってゐる」とする。その暗さの原因は詩人の疲労感にあって、「つかれは巨きな孔雀に酸えて／松の林や地平線／たゞ青々と横はる」という。詩人の

疲労感が、煙霧にかすんだ春景色を、酸えた孔雀に変えている。

一〇四〇番「日に暈ができ」（一九二七、四、一九、）は追加稿で、「日に暈ができ／軟風（かぜ）はつめたい西にかはった／／あゝレーキ／あんまり睡い／（巨きな黄いろな芽のなかを／たゞぼうぼうと泳ぐのさ）／／枝をくぐってくる風と／もうろうとしたかげらふの紐」といった表現は、自然との交歓感覚がある点で前年の「疲労」と対応している。だが、すでに雲から電気を取るゆとりはない。

一〇四三番「市場帰り」（一九二七、四、二一、）は、朝の明るい通りをスケッチしたものである。晴天の朝日の中で「雪と牛酪（バター）を／かついで来る詮之助」「あたまひかって過ぎるのは／枝を杖つく村老ヤコブ」「かばんをさげたこどもら」が、行き交いつつ朝の挨拶を交わす姿に村の生気がみえている。構成の上では、「風景」や［アカシヤの木の洋燈（ランプ）から］に対応する。

一〇五三番［おい　けとばすな］（一九二七、五、三、）は、一度保留された作品である。しかも、一度保留した後に、改めて「田園詩篇」に採択された時は、作品の内容がすっかり変わっている。下書稿（一）の「政治家」の段階で、詩人は「ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたいやつらばかり」の世の中を、「人間の石炭期」と捉えていた。これが㋐印をつけられた下書稿（二）の「測量」段階では、「早いはなしが／巨きな赤い毒蕈だな／ところがおよそきのこなら／どんな大きなきのこでも／ひとりで崩れてひとりで雨にとかされる／（中略）／山の上はつめたい雲のラムネ／どうだ親方みんなであれを一ぱいやるか」（㋐印と同じ筆記用具の藍インクの手入れ形）とある。毒蕈（ブスきのこ）同然の親方を誘って、蕈をとかす雲のラムネの雨を飲ませようというのだから、ブラック・ユーモアである。原稿の紙葉に折り目をつけてあるのは、保留された標しであろうし、その保留も自然であろう。これが、最終形の［おい　けとばすな］では、「おい／けとばすな／けとばすな／なあんだ　たうたう／すっきりしたコチニールレッド／ぎっしり白い菌糸の網／こんな色彩の鮮明なものは／この森ぢゅうにあとはない／あゝムスカリン」とあって、蹴飛ばされたムスカリン（テングダケの類）への哀惜を込めた表現となっている。人への批判が、自然スケッチ的表現の中にすっかり包み込まれている。この保留と改稿は、一〇〇一番［プラットフォームは眩ゆくさむく］の改稿過程と軌を一にする。「田園詩篇」の構成意図をよく反映したものといえよう。

一〇六八番［エレキや鳥がばしゃばしゃ翔べば］（一九二七、五、一四、）の詩人はまたも病床にいる。挿入句に「けふもまだ熱はさがらず」とある。熱にうなされた夢で深い森の中に立ち、「エレキや鳥がばしゃばしゃ飛」ぶ空を見上げると、「枯れた巨きな一本杉が／もう専門の避雷針と見られ」、その「杉をめぐって水いろなのは／羊歯の花をとって来て／梢いっぱい飾りをつけた／古い櫸の樹でもあらう」と思われるという。そうした中で「Nymph, Nymbus, Nymphaea …」とか、「最后に／火山屑地帯の／小麦に就いて調査せよ」などといったことばが、詩人の脳裏をかすめている。精神分析学的研究を誘う表現で、詩人は早くも「枯れた巨きな一本杉」に、自身の姿を見ているのかもしれない。これも詩人にとって、自然からのメッセージと受け取られている。

f　一九二七年夏

一〇七二番「県技師の雲に対するステートメント」（一九二七、六、一、）は、一度追加されたものだが、不順な天候をもたらす雨雲に対して、不

満をぶちつけている。しかし、この作品が書かれた紙葉に「縦横に四つ折りの痕跡」があるのは、やはり保留されたことを意味するのであろう。詩人が突然「県技師」の肩書きを持っていて、田園詩人とは違った性格を付与されているのは不自然でもある。この保留は、作者が「田園詩篇」に、ひとりの詩人を主人公に想定した物語風の構成を与えていたことの現れでもあろう。

疲れた詩人は、一〇七九番「僚友」（一九二七、七、一、）において、「荒れた耕地やけはしいみんなの瞳を避けて／（中略）／昨日の安易な住所を慕ひ、」昔の勤務先を訪れるが、そこに察知される違和感は、かえって詩人の心を打ちのめすものでしかない。

一〇八〇番［さわやかに刈られる蘆や］（一九二七、七、七、）では、一切の余分な表現が削り落とされ、残されたのは「さわやかに刈られる蘆や／水ぎぼうしの紫の花／／赤くただれた眼をあげて／風をみつめるその刈り手」の四行のみである。しかし、そこで表現しようとしたものは、下書稿（四）段階で「さわやかに蘆は刈られて／今年も燃えるアイリスの花／（二字さげ）……洞の眼をして／（四字さげ）風を見つめるその刈り手……／幾重の山に雲たゞなびき／ほのかにのぞく西の天／（二字さげ）……汗にやつれたおももちは／（四字さげ）一つの動機臨むとき／（四字さげ）聖者の像を持ち来す……／けりが滑れば／黄金の芒」とあるので、おおよそ知れよう。「赤くただれた眼をあげて／風を見つめる」眼は、「洞の眼をして」いるに違いないが、詩人がそこに見ているものは、「一つの動機臨むとき／聖者の像を持ち来す」ものだったのである。『疾中』には、「瓔珞もなく沓もなく／たゞ灰いろのあらぬのに／庶民がさまをなしまして／みこゝろしづに居りたまふ／／（中略）／／瓔珞もなく沓もなく／はてなき業の児らゆゑに／みまゆに雲のうれひして／さこそはしづに居りたまふ」と、不軽菩薩のイメージを描いている。

g　一九二八年夏

最後の「停留所にてスキトンを喫す」（一九二八、七、二〇、）は、「かなり熱がある」ために「玻璃製の停留所も／なんだか雲のなかのよう」に思われる状態の詩人が、仲間からわざわざ届けられた「帆立て貝入りのスイトン」を、「雲でもたべてゐるやう」に思っていると、稲作相談のために訪れる者もある。しかし、その人は「その顔も手もたゞ黒く見え／向ふもわらってゐる」という。黒い人影に笑いかけられた詩人は、仲間の好意のスイトンもついに食べきれぬまま、「電車が来る間／しづかにこゝへ倒れやう／ぼくたちの／何人も何人もの先輩がみんなしたやうに／しづかにこゝへ倒れて待たう」としている。

「停留所にてスキトンを喫す」が、その前の［さわやかに刈られる蘆や］との間に約一年の空白をおいていることは、構成の面で大きな問題をはらんでいる。この空白を積極的に解釈する方向での検討と、この空白を構想の未完成と捉えてこれを埋める作品の探索に向かう方向での検討が必要だが、予定された頁数を考えるならば、後者の方向で考える方が妥当だろう。いずれにしても、この点の確認は、次の問題になる。今は、この欠落を欠落として確認することで、「田園詩篇」の輪郭を捉えることにとどまる。

こうした大きな問題を含むうえに、個々の作品のモティーフの分析しか持ち得ぬ現在の筆者には、委曲を尽せぬ恨みは免れぬが、約三〇篇の表層をなでてきただけでも、「田園詩篇」が「諸仏と衆生の徳の配列」

によって創造された小世界において、農村改良運動に身を挺して倒れた一人の詩人の半生を描くことを予定したものであったことは、およそ推定されよう。

三　「田園詩篇」の周辺

「田園詩篇」の輪郭を以上のように捉えると、この欠落を埋める作品の推定が次の関心の的になる。そこで注目されるのが、第一には『第三集』の残りの作品であり、第二には『装景手記』『補遺詩篇Ⅰ』『補遺詩篇Ⅱ』などの未定稿であろうが、後者の場合、改稿過程で変化の大きいこの作者の創作方法からすれば、その作品の特定はおそらく困難であろう。そこでさしずめ可能な範囲で、少しでも欠落を埋めるものを探るとすれば、『第三集』作品からということになる。

では、『第三集』の中に見てきたもの以外で、「田園詩篇」に含められる可能性がある作品はどのくらい残されているのであろうか。『詩稿補遺』に移行されたものと先に見た「田園詩篇」とその関連作品三十篇を除くと二五篇が残るのみだが、そのなかでも、赤罫詩稿用紙稿段階に止まっているもの（三篇）は、㋐印で選択に漏れたものとみて除くこととし、黄罫詩稿用紙稿であっても、最終稿に×印がつけてあったり（一篇）、墨で習字がされているもの（一篇）は作者が作品を放棄したものとみなされよう。また、最終稿に手を入れた形跡は残るが手入れ形が完成していないもの（三篇）や、原稿の紙葉に折り目があるもの（二篇）は、保留扱いされたものと考えられる。この他、原稿に「不足」とか「不適」と記されているもの（六篇）は、やはり除かれるべきだろう。さらには、使用時期が特定できない「S. N. 原稿用紙」に記されたものも保留する（二篇。黄罫24系詩稿用紙より後に使われているが、黄罫22系詩稿用紙より後に使用された可能性を否定する資料がない）と七篇のみが残る。

この七篇については、多くの作品が様々な形で放棄されたり保留されたりしている中で、保留扱いされていないという意味で、この段階での作者の目を通過した作品といえるであろう。それが「田園詩篇」に相応しいものであるという確実な保証はないわけだが、この七篇を先の区分に合わせて、該当する季節に配当して検討してみると、大体次のようになる。

一九二六年秋には七三八番「はるかな作業」（一九二六、九、一〇、）があてはまる。これは「ぎらぎら縮れた雲と青陽の格子」と「そらをうつして空虚（うつろ）な川と／黒いけむりをわづかにあげる／瓦工場」の間から響いてくる歌声によって、農村の共同作業を捉えたもので、詩人が「ここの畑できいてゐれば／楽しく明るさうなその仕事だけれども／晩にはそこから忠一が／つかれて憤って帰ってくる」というものである。農村の共同作業の外面と内面を描いたものとして田園生活の大切な一面を補うものである。「田園詩篇」に加えられる理由は十分あるであろう。

一九二七年春に該当する作品は、一〇三七番「宅地」（一九二七、四、一三、）と一〇六六番［今日こそわたくしは］（一九二七、五、一二、）の二篇である。「宅地」は畑で豚がまるでいたずらっ子のように餌を漁り、「家のなかではひとり置かれた赤ん坊が／片っ方の眼をつぶってねむる」様を描いたものである。［今日こそわたくしは］は、詩人が室内で飛び巡る虻を一日見詰めていたというものである。前者を加えることで、「田園詩篇」に平和な、しかし母親に側で見守られぬまま眠る嬰児が加わる。「赤ん坊が／片っ方の眼をつぶってねむる」というのは、七

二六番の「風景」の「片頬黒い県会議員」とも共通するところがあり、ピカソやマチスの絵を連想させる表現である。後者は一人ずまいの静かさを暗示して、余すところがない。これが、一〇六八番の［エレキや鳥がばしゃばしゃ翔べば］の直前に位置することから、病床にいる詩人が、おのずと推定される。

一九二七年の夏には、一〇七六番「囈語」（一九二七、六、一三、）一〇八二番［あすこの田はねえ］（一九二七、七、一〇、）一〇二一番「和風は河谷いっぱいに吹く」（一九二七、八、二〇、）が該当する。「囈語」では病気の熱に犯されてうなされた状態でも農民のために尽くそうとしている詩人の妄想が描かれ、［あすこの田はねえ］では若い青年に細かく稲作指導をして尽力する詩人の姿が具体的に描かれている。これが一〇七九番の「僚友」の後にあるとすれば、学校教育と農業の現実の落差を、詩人も噛み締めていたことになろう。「和風は河谷いっぱいに吹く」は、記録的な夏の長雨に苦しんだこの年、わずかに風が変わって晴れ間が見えたとき、願いを込めて描いた作品である。[8] 作品番号が日付と合わないのは、差し替え稿の形で番号が変更されたためである。[9] この作品が加えられる場合は、番号順の編集はおそらく断念されていると思われる。この三篇が「田園詩篇」に加わることは、詩人がいかに農業指導に力を尽くしたかを鮮明にする意味をもつ。

さらに一九二八年春には、「台地」（一九二八、四、一二、）が加わっている。これでは、「日が白かったあひだ」に田植え前の水田を見て回り、夕方になって台地にのぼり、「排水や鉄のゲル／地形日照酸性度」など、一日考えてきた現実的な問題を忘れて、後から来る二人の先達を振り返ると、彼等が「この国の古い神々の／その二はしらのすがたをつくる」と見えるので、その人達が「今日は日なかでしばしば高雅の神であり／あしたは青い山羊となり／あるとき歪んだ修羅となる」ことを思い、別れに際して「衷心この人を礼拝する」というものである。人の存在の不思議に思いを潜めながら、春の夕日の中の一場面が描き取られている。「田園詩篇」にこの「台地」が加わることは、「停留所にてスキトンを喫す」において「ぼくたちの／何人も何人もの先輩がみんなしたやうに／しづかにこゝへ倒れて待たう」としたことへの繋がりを滑らかにしているように思われる。

以上の検討を踏まえて、七篇の周辺作品を「田園詩篇」に加えることには、さして大きな問題は無さそうである。したがって、一九三一年段階での「田園詩篇」構想には、およそ三五篇が用意されていたと考えられる。[10]

《第三集》全体の構想解明のためには、なお『疾中』の分析に加えて、『春と修羅　第二集』の構想変容過程を含む日付と番号の意味の問題が解決されなくてはならない。

注1　『校本全集』では、詩稿用紙を厳密に区分しているが黄罫（22 22行）詩稿用紙と黄罫（22 0行）詩稿用紙との使用時期の区別が現在ではできないので、これらを一括して黄罫22系詩稿用紙と記し、他の黄罫詩稿用紙についてもこの例に従う。

2　拙稿「作品番号の欠落過程と《春と修羅　第三集》一九三一年構想」（「島根大学教育学部紀要」27巻1号　1993.12.）参照。

3　『春と修羅　第二集』の下書稿の場合は、主として赤罫詩稿用紙と黄罫22系詩稿用紙に書かれている。その他の雑多な用紙に書かれ

ているものは、『詩稿補遺』へ移行する作品に集中している。この点に注目すれば、『補遺詩篇Ⅱ』の中に『詩稿補遺』と同質の作品が混じっている可能性もあるが、これは今後の課題とする。

4　拙稿「《春と修羅　第三集》一九三一年構想「生活・社会詩篇」試論」（「島大国文」22号　1994.3.）参照

5　一九二六年八月七日の「岩手毎日」の記事によると「花巻地方も降雨が甚だしく朝日橋下に六日午前七時十尺、豊次橋は同七時五尺五寸の増水があった」とある。

6　「白菜畑」に日付がないのは、これが作品番号から見て七四一番「煙」（一九二六、一〇、九）の分岐型逐次稿として発想され、七四五番［霜と聖さで畑の砂はいっぱいだ］（一九二六、一一、一五）と融合されたことに起因する。このような作品の融合がなされた場合、作品番号は早い方を引継ぎ、創作日付は主要な素材を得た日の方に変更するのが通常だが、この場合は、そうすると追加稿の七四三番［盗まれた白菜の根へ］（一九二六、一〇、一三）との間で矛盾が生じるため、創作日付を付記できなかったと考えられる。

7　拙稿「資料と考察『春と修羅　第三集』および『詩ノート』における創作日付の日の気象状況」（山根巴、横山邦治編『継承と展開』第六巻　和泉書院刊に収録予定）参照頂きたいが、ここに関連する気象情報については別表Ⅰの通りである。

8　関連する気象情報は別表Ⅱの通りである。

9　拙稿「『春と修羅　第三集』『詩ノート』における作品番号と創作日付に関する一考察」（「国文学攷」140号　1993.12.）参照。

10　詳細に見るならば、方法意識が明確でないという意味で『詩稿補遺』移行作品とのモティーフ上の接点を含むものがある。これが作者の作品選抜に影響を与えていたかもしれない。

別表Ⅰ　一九二六年九月一三日　七三九［霧がひどくて手が凍えるな］創作日付の日の気象資料

a　盛岡気象台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
S 3.8			0.4			1
S 2.7			—			2
S 1.5			—			3
S 2.9			—			4
SW 3.9			—	—		5
S 5.4	Ck S	7	—	—	◑	6
S 3.3	Ck S	9	—	—	◎	7
SW 3.6	Ck K S	9	—	0.59	◎	8
SSW 1.7	Ck K	8	—	1.00	◎	9
WNW2.4	K	6	—	1.00	◑	10
W 2.9	Ck K	6	—	1.00	◑	11
W 5.8	Ck K	6	—	1.00	◑	12
W 4.3	Ck K Kc	5	—	0.90	◑	13
W 3.1	Kc Ck K	7	—	1.00	◑	14
WNW4.1	Ck Kc K	5	—	0.65	◑	15
W 4.7	Ck K	6	—	0.48	◑	16
W 3.2	Ck Kc K	3	—	0.96	◑	17
W 0.6	Ck K Sc	5	—	0.53	◑	18
NNE2.2	Sc	5	—	—	◑	19
SE 2.9	Sc S	3	—	—	◑	20
SSE 2.6	Sc S	4	—		◑	21
SE 2.3	N S	10	0.0		●	22
SE 1.4			0.0			23
SE 0.5			0.4		●	24

b　水沢天文台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
S 1.6	S	10	1.5	21.5	2
S 1.0	Cs Sk	10	—	20.5	6
E 1.7	Sk	7	—	28.1	10
NW 4.4	Sk Kc	4	—	28.5	14
— 0.2	S Kc	2	—	24.7	18
— 0.0	Sk	7	—	21.5	22

［記事］〈花巻〉　最低気温摂氏二〇・五度、最高気温摂氏二八・九度、午前一〇時の気温摂氏二三・〇度、降水量二一・九㎜。

この日は、早朝と夜に雨が降って、層雲がでているが、日中はおおむね晴れて気温も上がっている。この日の朝の最低気温を見ても寒い朝ではない。ただ、朝、層雲が記録されている。

別表Ⅱ　一九二七年八月二〇日　一〇二一「和風は河谷いっぱいに吹く」創作日付の日の気象資料

a　盛岡気象台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
SSE 0.5			—			1
SSE 1.2			—			2
— 0.2			—			3
— 0.2			—			4
— 0.2			0.0	—	●	5
S 1.2	S Kn	10	0.2	—	◎	6
S 1.5	S K	10	—	—	◎	7
SW 1.3	N Kc	10	0.1	—	●	8
SW 0.6	N S	10	3.0	—	●	9
NW 0.5	N S Kc	10	0.5	—	●	10
S 0.5	S K	10	0.0	0.28	◎	11
— 0.4	S Kc	10	—	0.10	◎	12
SSW 1.5	N S	10	0.1	—	●	13
NNE3.9	N	10	0.7	—	●	14
NE 4.9	N	10	4.9	—	●	15
N 4.3	N	10	4.3	—	●	16
N 5.0	N S	10	1.6	—	●	17
WNW2.6	S	10	0.0	—	◎	18
N 2.2	N Kc	10	0.4	—	◎	19
N 0.9	S	9	0.0	—	◎	20
N 0.9	S	10	—		◎	21
N 1.2	S	10	—		◎	22
NNE1.9			—			23
N 1.5			—			24

b　水沢天文台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
— 0.4	S	10	7.0	23.9	2
N 2.2	S	10	—	23.9	6
— 0.3	Sk	10	0.1	25.2	10
SE 5.0	Sk	10	0.0	28.4	14
N 1.9	N Sk	10	0.1	21.0	18
WNW1.1	Sk	4	—	20.3	22

［記事］〈花巻〉最低気温摂氏二一・五度、最高気温摂氏二六・五度、午前一〇時の気温摂氏二四・五度、降水量八・〇㎜。〈盛岡〉霧4・20―6・33。雷電・雷鳴・電光頻繁。〈水沢〉雷鳴15・45。この日の前日の花巻の降水量は97・0㎜。おそらく前夜から朝にかけての雨であった。この日も終日雨が降っているが、午後風が北風あるいは西北西の風に変って、翌日の晴天が予想される日であった。

別表Ⅲ　《第三集》「田園詩篇」

	番号	作品名（選択された逐次稿）	創作日付	下書稿段階の作品題名	黄野22系詩稿用紙稿の有無	定稿詩稿用紙稿の有無	文語詩化の有無	その他
Ⓣ印で選択されたもの	706	村娘（下書稿二）	1926. 5. 2.	同				
	711	水汲み（下書稿三）	1926. 5.15.	同	○	○		
	714	疲労	1926. 6.18.	同			○	
	× 718	蛇踊	1926. 6.20.	同				→詩稿補遺
	× 718	井戸	1926. 7. 8.	同				→詩稿補遺
	726	風景	1926. 7.14.	同				
	728	［濂雨（カダチ）はそそぎ］（下書稿三）	1926. 7.15.	［雨はそゝぎ］	○		○	
	733	休息（下書稿三）	1926. 8.27.	同				
	736	［濃い雲が二きれ］	1926. 9. 5.	同				
	739	［霧がひどくて手が凍えるな］	1926. 9.13.	朝	○		○	
	740	秋（下書稿二）	1926. 9.23.	同				
	741	白菜畑（下書稿二）		同				→補遺詩篇Ⅱ
	>1012	［甲助　今朝まだくらぁに］（下書稿三）	1927. 3.21.	会合	○			
	1014	春（下書稿二）	1927. 3.23.	同			○	
	1017	開墾（下書稿二）	1927. 3.27.	同				
	×1025	［燕麦（オート）の種子をこぼせば］（下書稿四）	1927. 4. 4.	同				→詩稿補遺
	1030	春の雲に関するあいまいなる議論（下書稿三）	1927. 4. 5.	同			○	→補遺詩篇Ⅱ
	1032	［あの大もののヨークシャ豚が］（下書稿二）	1927. 4. 7.	森	○		○	
	1036	燕麦播き（下書稿三）	1927. 4.11.	同				
	1043	市場帰り（下書稿二）	1927. 4.21.	同			○	
	W1053	［おい　けとばすな］（下書稿二）	1927. 5. 3.	朝	○		○	
	W1056	［秘事念仏の大元締が］（下書稿二）	1927. 5　7.	同			○	
	1068	［エレキや鳥がばしゃばしゃ翔べば］（下書稿二）	1927. 5.14.	同		○		
	1079	僚友（下書稿二，三）	1927. 7. 1.	同				
	1080	［さわやかに刈られる蘆や］（下書稿五）	1927. 7. 7.	同			○	
		停留所にてスキトンを喫す	1928. 7.20.	同				
追加稿	727	［アカシヤの木の洋燈から］（下書稿二）	1926. 7.14.		○		○	
	730	［おしまひは］	1926.8. 8.		○			
	743	［盗まれた白菜の根へ］（下書稿四）	1926.10.13.		○	○		
	1001	［プラットフォームは眩ゆくさむく］（下書稿五）	1927. 2.12.		○			
	1008	［土も掘るだらう］	1927. 3.16.		○		○	
	1040	［日に暈ができ］（下書稿二）	1927. 4.19.		○	○		
	1072	県技師の雲に対するステートメント（下書稿三）	1927. 6. 1.		*○	○		
周辺稿	738	はるかな作業	1926. 9.10					
	1037	宅地	1927. 4.13.				○	
	1066	今日こそわたくしは	1927. 5.12.					
	1076	囈語	1927. 6.13.				○	
	1082	あすこの田はねえ	1927. 7.10.					
	1021	和風は河谷いっぱいに吹く	1927. 8.20.					
		台地	1928. 4.12.					

注　×印、改稿後『春と修羅　詩稿補遺』へ移行する作品。

>印、紙葉に「横に二つ折り（上辺と下辺が重なるように）されていた痕がある」もの。本表記載以外の『第三集』の例では、743「盗まれた白菜の根へ」下書稿（二）、1001「プラットフォームは眩くさむく」下書稿（三）、1075「囈語」「まぶしくやつれて」下書稿がある。

W印、紙葉に「横に四つ折りされていた痕がある」もの。本表記載以外の『第三集』の例では、1042「同心町の夜明けかた」下書稿（五）がある。

*印、紙葉を「縦横に四つ折りした痕跡がある」もの。